



Contents

- ・【巻頭エッセー】自粛、あれこれ思うこと
… 堀江志磨 ●表紙
- ・【Parlando Interview】自分だけのものを
今井慎太郎先生 きき手・八重樫悠暉 ●2～5
- ・風景の中で⑥… 図書館長 井上郷子
資料の部屋⑥… 高橋京子 ●6
- ・【私のおすすめ】… 古田もね 吉原佑香 ●7
- ・国立国会図書館デジタルコレクション
Information ●8

Parlando

ぱるらんど 「語りかけるように歌う」という意味の楽想記号です

No. 308

【巻頭エッセー】 自粛、あれこれ思うこと

堀江 志磨

春先のコロナ自粛中に、幼なじみから「7日間ブックカバーチャレンジ」というバトンが回ってきた。Facebookのイベントである。投稿にはあまり熱心ではない私だが、大学のオンライン授業が決まり、Google Classroomなるものの習得や、授業運営のための慣れないオンライン会議で、文字通り朝から晩までパソコンにかじりついている日々の気分転換になればと、ぼちぼち始めてみることにした。

私は、本の重みと匂いが好きである。昨今は、電子書籍が台頭してきて、ある意味便利な世の中になったが、本を手にとったときの重み、ページを開いたときの印刷の匂い、ページをめくるときの指先の感触と微かな音、そんなことに私はものすごく愛着を感じる。7冊を選び出すために、自分の本棚の前に立ち、あれにしようか、これにしようかと、本を手に取りページをめくってみた。新しい本には新しい本の、古い本には古い本の匂いがし、目に映る文字と相まって、読んだ当時の気持ちや状況が蘇り、一瞬タイムスリップしたような気分になった。嗅覚と記憶の結びつきの強さは、他のどの感覚にもかなわないと思う。パソコン作業で疲れが溜まる中で、徐々に気持ちを刺激される心地よさを味わった。

候補の本を絞っていくなかで、改めて思うこともあった。私には本の最後に読んだ日の日付を入れておく習慣がある。今回、自分の心に深く刻まれている本を選んでいくと、意外なことにそれは最近読んだ本ではなく、10代終わりから20代

の終わりにかけて読んだ本がほとんどであった。学生時代に友達と競うように読んだ本であったり、留学を決めて、日本を知りたくて読んだ本であったり、また留学中にどうしても日本語の活字が読みたくなって、遥々電車に乗って日本語の本を売っている本屋まで行き、もどめた本であったりした。

昔、人生の先輩たちに、若い時は、怖がらずなんでもやっておきなさい、聴きたいものがあるならどこまででも行きなさい、なんでも見て読んでおきなさい、と言われたのは、こういうことなのかと改めて思い至る。感受性の豊かな時期に身に「入れたもの」は時を経ても抜けてはいかない。必要に迫られて、あとから付け焼き刃でかじったものは、見聞きしたことすら時のかなたに置き捨てているのだと思う。

世の中の変化は、それはすごい勢いですすむ。少し前まで、ZoomもGoogle Classroomも聞いたこともない言葉であったのに、今では当たり前のように日々の会話に登場してくる。それらのツールを使っている自分が時々信じられなかったりもする。変わっていくものに乗っていくしなやかさは、今の時代には絶対に必要なことだ。一方で、変わっていくものに翻弄されて、自分でも気づかぬうちに大切なものを失っている可能性もある。動いていく時代の中において、しばし立ち止まって自分の立ち位置を考え、取捨選択する余裕を持ちたい。思いがけないFacebookの投稿を通じて、そんなことを感じた。

●ほりえ しま 本学准教授(ピアノ)

誌上

Parlando Interview

きき手：八重樫 悠暉（演奏・創作学科作曲専修4年）



今井 慎太郎 先生

(いまい・しんたろう)

・ 自分だけのものを ・

コンピュータなどのテクノロジーを用いた研究や作曲活動で知られる今井慎太郎先生。例年と異なり今回は「誌上インタビュー」という形で迫ってみました。

無意識からなる音楽観

—— 先生の幼少期の音楽環境をお聞かせください。

今井 音楽とはあまり縁のない幼少期でした。とくに両親が音楽好きということもなく、ロック・ミュージシャンに憧れて楽器を手にしたのも中学の終わりのころです。ただ振り返ると、長野県の茅野市という音環境に育ったことは、原体験として強く残っているようです。蓼科山から続く一級河川の「上川」や田畑のために張り巡らされた用水路からは高周波とゆらぎを含む水流音が定期的に聞こえ、昼には野鳥の、夜には昆虫や小動物の発する多彩な噪音に満ち、山に囲まれた地形はそれらを増幅します。そして、市街地を離れば遮蔽物もまばらで、年間を通した湿度の低さもあって、幽かな遠音がとても明瞭に聞こえるのです。包まれていながらも上空に抜けてゆくような透徹とした音空間は、僕の目指す音づくりの理想型ともいえます。

もう一つの原体験は、小学生の頃に登場したファミリーコンピュータでしょうか。ゲームに夢中になると共に、その音楽も無意識ながら愉しんでいました。初代ファミコンは基本的に、3種類の単純な電子音を、効果音も合わせて同時に3つまでしか鳴らさせません。そ

のような制限下にあっても、スーパーマリオでは軽快な音楽にいろんな効果音がうまく「ノって」気持ち良く、特にジャンプの音は身体感覚によくフィットし、距離が伸びると身体の内側も伸びるような感覚を与えてくれます。いまならば、ピッチや音量の絶妙な変化の仕方や全体の「オーケストレーション」でそれが達成されていたと分析できます。ドラゴンクエストの音楽も、当時は全くなじみのなかったオーケストラへの興味をかき立ててくれるものでした。さらに、オーケストラを2～3声で表現するというのは、人間の想像力を駆使した極限の情報圧縮であるとも言え、あらためて驚嘆します。

成り行きからの始まり

—— 電子音楽を学ぼうとしたきっかけを教えてください。

今井 問われて気づいたのですが、電子音楽を学ぼうと思ったことは実は一度もないのです。最初は成り行きで学び始めた、というのが正直なところ。高校3年生で進路に悩んでいたとき、大学で音楽を学びたかったのですが、ピアノもソルフェージュもほとんどできませんでした。そんなときに見つけたのが、それらが入試科目にない国立音楽大学音楽デザイン学科(当時)でした。学科紹介にはコンピュータとか音環境とか、なんだかよくわからないけれど面白いキーワードが並び、これだと思って受験したところ、合格をすることができました。そして大学で初めて触れた、電子音楽というよりもコンピュータ音楽に、すっかりはまり込んで今に至ります。

ところで、僕がこれまで主に取り組んできたのは生楽器や声、あるいは環境音など現実の音をコンピュータで加工することですが、それって「電子音」なのでしょうか。録音再生技術は専ら電子的なメディアによっていますが、生楽器を録音したものはふつう電子音とは呼びませんよね。ではそこに残響を足したらどうでしょう。クラシック音楽の録音でも、世に発表されているものは多くがそのような後処理を伴っています。もっと残響を足していったら？ ピッチを補正したら？ 「不要な」ノイズを除去したら？ 現実の音はどこから電子音になるのでしょうか。電子的なメディアを介する以上、現実の音と電子音は別のものでなく、一続きのスペクトラムなのではないかと思っています。

内在する作曲家

— 好きな作曲家は？

今井 ジェラルド・グリゼイが好きで、とても大きな影響を受けました。《Périodes》を初めて聴いたとき、それまでに知っていた音楽とは全く違うものであると感じました。器楽曲でありながら、音符ではなく音響（音色）で作曲されているのです。そして自然に流れるような漸次変化の美しさにもかかわらず、楽譜を見ればそこには確固とした構造があります。氏は楽器音による加算合成を提唱し、「スペクトル楽派」の祖を築きました。加算合成というのは、周波数が整数倍の関係にあるサイン波を複数足し合わせ、各々の強さの変化で音色の変化をつくるという、電子音楽で用いられる古典的な技術です。それをグリゼイのような楽器音やサイン波以外の、あらゆる音で実現できないかと考えて開発したコンピュータプログラムは、僕の多くの作品で使用しています。

アルゼンチンの作曲家ホラシオ・ヴァッジオーネも好きです。一聴しただけで氏の音楽とわかる、無二のシグネチャサウンドを持っています。それはマンネリズムと紙一重かもしれませんが、秒間数百のマイクロサウンドから成り立つ音楽は、聴く度に違う様相を呈してまったく飽きないのです。ハース効果（左右のスピーカーから出力する音の時間差による錯聴）を応用した音空間の創出や、持続による緊張と爆発による弛緩という音楽構造も独特です。

ピエール・ブーレーズも僕にとって重要な作曲家です。ブーレーズが設立した音響・音楽研究所IRCAMで開発されたハードウェアやソフトウェアで僕は大学時代に学び始め、その後は実際にIRCAMでも作曲とコンピュータ音楽を学びました。そして氏の代表作である《レポン》の改訂版日本初演、しかもIRCAMのスタッフが全く関わらない世界初の上演を、エレクトロニクスパートの担当として国立音楽大学で実現することになりました（<https://www.youtube.com/watch?v=nYpjQsN4w1E>）。現在は日本学術振興会の助成（科研費）を受け、それに関連する研究も

続けています。

また、作曲家ではありませんが、学生のころに見たウィリアム・フォーサイスのダンスと、ダムタイプのパフォーマンスには、人生が変わるほどの衝撃を受けました。

日本と海外の電子音楽事情

— 先生は国立音楽大学大学院を修了された後、フランスやドイツなど海外にも渡っておられますが、電子音楽の観点から日本と海外で違いなどありましたら教えてください。

今井 海外といっても、僕が知るのはフランスとドイツ、あとアメリカをすこし、といったところですが……アカデミックな創作領域でいうと、概してヨーロッパはアート指向、アメリカは研究指向、そして日本はその中間、というのは歴史的にいえるかもしれません。演奏領域については、ヨーロッパでは器楽の試験やコンクールでライブエレクトロニクス作品が課題となるのがこのところ増えているそうです。演奏家が自身でコンピュータやPA（コンサート音響）を操作するようなケースも見られるようになってきました。日本でもそういう状況にしていきたいと考えて、演奏系の学生が履修できるライブエレクトロニクス演習を大学院で昨年度から開講しました。また、コンピュータ音楽の専攻外学生も借りられる、マイクやスピーカー、ミキサーなどの音響機材を楽器室に導入してもらいました。

創作する上で

— 音楽作品を創作する際に、何を一番意識していますか？ また、コンピュータなどのテクノロジーを使用して作品を作ることでしか味わえない面白さや興味深い点など教えてください。

今井 まずは自分が興味をそそられる魅力的な音、音楽に至る前の音響をつくることです。登場人物を造形できれば、物語は自然に立ち上がってくる、と語る小説家は少なくありません。まさに僕にとっては音そのものが登場人物であり、そこに含まれる音色や強度の抑揚を拡大したり、別の音＝登場人物を関わらせていけば、自然に音楽が立ち上がってくるのです。

また、電子音を用いるときは、それが自然に聞こえるように調整することを意識しています。自然には決して存在しない音が、それでも自然に違和感なく聞こえたときにこそ大きな驚きが生まれますし、不自然な音



との表現上のコントラストもつくれます。電子音を自然に聞こえるようにするために大切なのは、音の立ち上がり、変化の仕方、そして消え方に細心の注意を払うことです。現実世界では、音を発する物質の強度や密度、音が響く空間の形状や空気抵抗、さらには重力や遠心力などの物理的作用によって、音の変化は規定されます。人間はそれを自然に感じるのです。一方のコンピュータは物理ではなく論理で動いているので、そこに大きな違いがあり、すりあわせが必要になります。

コンピュータを使うことの面白さ、醍醐味は、プログラミングにあります。プログラミングで、自分だけのための道具、自分だけのための楽器をつくることのできるのです。本学招聘教授の細川俊夫先生が、新しい音楽をつくるということは新しい楽器をつくることである、と比喩的におっしゃっていましたが、僕はコンピュータで文字通りそれを行っています。その楽器は、自分だけの音を出すのみならず、独自のアルゴリズムによりコントロールすることで、音楽の構造とも関わらせることができます。音響から作曲までを一貫して考えられるのも、コンピュータならではのようです。プログラミングはそれ自体がとても楽しいものですから、なんだか難しそうと敬遠せずに、多くの人に挑戦してほしいですね。

また、コンピュータは音とそれ以外の、例えば映像やセンサー、物理デバイスなど、いろんなモノやコトをつなぎ合わせるのが得意です。コンピュータの中では、あらゆるものが等しく数値で表現されるからです。原初的な表現欲求はどんなメディアで表出しても良いわけで、高性能なコンピュータを個人で扱える現代は、そのための障壁がとても低いと感じます。たとえば音大生が視覚的な表現に、美大生が聴覚的な表現に取り組むというのは、とても現代的で、創造的だと思います。

—— 音楽をやっていて良かったと感じたことはありますか？

今井 いい音楽に出会ったとき、特にそう感じます。それは快楽であり、驚きであり、靈感であり、また感情を大きく変容させる、時として危険なものですらあります。音楽をやっているからこそ、それをよ



やえがし ゆうき●数々の貴重なお話、ありがとうございました。今回のぼるらんどを手にして下さった方々が、このインタビューを通して少しでも視野を広げるきっかけになれば幸いです。

り深く感じられるのだと思います。また音楽は、感情だけでなく、身体にも知性にも訴えかける、さらにソーシャルとパーソナルの両極にまたがる、人間の営みの根幹に大きく関わるものです。音楽をやっているおかげで、一生退屈しそうにありません。

目が離せない「オルタ3」

—— 「オルタ3」による演奏表現に関する共同研究を開始してから約半年が経ちましたが、現在の状況についてお聞かせください。また、それ以外に先生が関わっている主な活動なども教えてください。

今井 共同研究は残念ながらコロナ禍により進捗のない状況です。僕がオルタ3の歌唱と動きのプログラミングを担当している、音楽家の渋谷慶一郎さんのミラノでの公演と新国立劇場での新作オペラも、来年に延期となってしまいました。ただ、ミラノで発表する予定だった渋谷さんとのプロジェクトを中心に、NHK Eテレ『ららら♪クラシック』（7月24日放送分）で取りあげていただきました。渋谷さんのピアノ即興に合わせてオルタ3がリアルタイムにメロディを生成して歌うというものです。身体の音楽的な動きを生み出す探求も含まれており、指揮をテーマとする東京大学との共同研究にもつながるため、そちらもこれから徐々に進めていければと考えています。ほかには、空間を表現要素として用いる現代音楽作品を仮想空間で実現する研究を行ったり、上野信一先生の委嘱でティンパニとライブエレクトロニクスのための新作を制作中です。またポピュラー音楽の領域で活躍する草間敬さんとユニットを組んで活動しています。

—— 最後にくにおんの学生へのメッセージをお願いします。

今井 いろんなことに挑戦し、好きだと思えるものをたくさん見つけてください。好きなもののユニークな組み合わせこそが、その人の個性であり強みになるからです。もちろん一つの物事を探求するのが大事なのは前提として、それが他の何かと組み合わせることで、価値は何倍にもなり、あるいは新しい価値が生まれるのです。時間に余裕があり、多少の「やらかし」も大目に見てもらえる学生時代は、試行錯誤に絶好のときです。僕自身も、学生時代のとりとめない経験が10年とか20年くらい経ってから思いもよらず組み合わせさせて活きた、ということをついたび実感しています。また、コンピュータは個人にエンパワメントする(力を与える)ものです。自分が自分らしくあるために、専攻を問わず、コンピュータを使いこなしていただきたいです。

—— ありがとうございました。(了)

～写真撮影：2020年8月7日 新1号館にて～

音や物の微細な運動を剪定し矯正することで創作を行う。国立音楽大学およびIRCAMにて学ぶ。2002年から2003年まで文化庁派遣芸術家在外研修員としてドイツのZKMにて研究活動を、また2004年にDAADベルリン客員芸術家としてベルリン工科大学を拠点に創作活動を行う。2008年よりパウハウス・デッサウ財団にてパウハウス舞台の音楽監督をたびたび務める。2015年に作品集『動きの形象』を発表。現在、国立音楽大学准教授および東京大学非常勤講師。www.shintaroimai.com

今井先生おすすめの資料

音と文明：音の環境学ことはじめ

大橋力著 岩波書店 2003 請求番号●J100-035

音大生の多くに必要なことは、西洋音楽の相対化ではないでしょうか。芸能山城組を率いる音楽家であり、また「ハイパーソニックエフェクト」を提唱する科学者でもある著者による本書は、そのための最良の指針のひとつです。広く音の世界を知ることで、西洋音楽の理解もより深まるでしょう。

虚数の情緒：中学生からの全方位独学法

吉田武著 東海大学出版会 2000 当館未所蔵●
TAC(ICU/津田塾大/東経大)所蔵あり

年を重ねるごとになぜか「ああ、もっと勉強しておけば良かったな……」と感じるもので、そのときにはぜひ本書を手にとっていただきたいです。芸術も数学も、およそ人間の営みというのはすべてがつながっているのだ、無駄なものなど何もないのだということを実感できます。

今井先生の著作関連

<図書>

人工知能が音楽を創る：創造性のコンピュータモデル
デイヴィッド・コープ著 今井慎太郎[ほか]訳 音楽之友社 請求番号●シラバス||今井慎太郎||22 (J135567)

<CD>

動きの形象：今井慎太郎作品集 = Works by Shintaro
Imai : Figure in movement Halfpi Records
2015 請求番号●XD71601[ほか]

fPB~「語れ、ムーサ / 紡ぐ糸」 ZIPANGU LABEL
2019 請求番号●XD76723

<基礎ゼミ>

基礎ゼミ2008「お話」Vol.1「音楽とテクノロジー」今井
慎太郎08.04.04講堂大ホール 請求番号●VE2132

<その他>

作曲ーノイズーテクノロジー(特集 ポスト・ノイズー越境するサウンド)『ユリイカ』37(3) 141-146 2005
請求番号●P1026 37(3)

パネルディスカッション：人工知能は作曲家/演奏家になれるか? 今井慎太郎[ほか] 『人工知能学会全国大会論文集』
JSAI2017(0) 2C40S20b3-2C40S20b3 2017
●J-STAGE

風景の中で ⑥



KILLING THE BOOKS

図書館長 井上 郷子

KILLING THE BOOKS… この物騒で衝撃的な言葉は、チェコのアーティスト、ミラン・クニザク (Milan Knizak, 1940-) によって制作されたパフォーマンス作品のタイトルです。1965年から70年にかけて作られたこの作品のイヴェントスコア (作品や上演についての指示書) には、by shooting by burning by drowning by cutting by gluing by painting white, or red, or black etc. と記されています。

書物を殺す … これはパフォーマンス作品ですから、演者は実際に、人々の前で書物を何らかの方法で亡き (無き) ものにします。いったい、ミラン・クニザクは、何を考え、感じていたのでしょうか。作品は時代の落とし子ですから、1960年代後半の世界の在り様とともに、彼女の内面に思いを馳せてしまいます。

言うまでもなく書物は人間の「知」の集積。それを (亡き) 無きものにする、ということは「知」を破壊すること。このショッキングなタイトルは、長い歴史の中で実際に行われたいくつもの“KILLING THE BOOKS”をいやでも思い起こさせます。古くは、秦の始皇帝時代の「焚書坑儒」、そして、1933年のナチス・ドイツによる焚書。「焚書」とは、権力による組織的で大規模な言論、思想統制の1つです

が、これは、ナチス・ドイツが、ナチズムの思想にあわないとされた書物を儀式的に焼き払ったもので、ナチズムを信奉する学生たちによって、25000巻以上の「非ドイツ的な」書物が燃やされたと言われていきます。「儀式的」というのは、学生たちはたいまつを掲げて行進し、広場で、バンド演奏「火の誓い」に合わせて、集められた本をかがり火の中に投げ込んだ、そして、これを機に、国家による検閲、文化の支配が、公然と、行なわれるようになった、という意味を含みます。恐ろしいのは「知」を誇る34もの大学の教授、学生自らが焚書の実行者となったことです。

このとき、詩人、ハインリヒ・ハイネの書物も火の粛清を受けました。驚くべきことに、これより100年以上も前、ハイネは書いています。「焚書は序章に過ぎない。本を焼くものは、やがて人間も焼くようになる。」

つい先日、香港では「香港国家安全維持法」が制定され、域内の図書館では、もはや反体制派の書物を借りることすらできなくなっています。「KILLING THE BOOKS」は決して遠い昔、遥かなる場所の記憶ではないのです。

資料の部屋 ⑥

朝ドラの人 古関裕而

図書館員 高橋 京子

4月からNHK朝の連続テレビ小説『エール』が始まっています。皆さんもご存知の作曲家古関裕而の生涯をドラマ化したものです。1964年の東京オリンピック入場行進曲《オリンピック・マーチ》を作曲したので、今年行われるはずだった東京オリンピックに合わせた企画でした。もしかして、皆さんの出身校の校歌作曲者だったりしませんか？結構、私たちの身近にも彼の作品は溢れています。このドラマをきっかけに、プロ野球チームの応援歌も多数手がけていたことを知りました。

奥様である金子さんと国立音楽大学もちょっとだけ関りがあったようです。本学教授になる前の、ベルトラメリ能子先生に師事されたそうです。

「朝ドラ」をきっかけに、続々と古関裕而関連本が出版されており、現在目録作成中も含めると十数冊の新刊が当館にも届いています。タイトルや副タイトルには、エールにちなんだ「勇気」「励まし」などが含まれており、こんなコロナ禍の時なので「音楽の力」

を実感させられますね。昭和の音楽シーンを牽引したといっても過言ではない作曲家、古関裕而さんの書籍をどうぞ手に取っててください。昭和初期の音楽界や、詩人との関りなどを知る手掛かりにもなりそうです。

～関連本の一部をご紹介～

古関裕而：流行作曲家と激動の昭和 請求番号●J136-082

鐘よ鳴り響け：古関裕而自伝 請求番号●J136-283

古関裕而：日本を励まし続けた応援歌作曲の神様
請求番号●J136-445

古関裕而応援歌 (エール) の神様 請求番号●J136-454

君はるか 請求番号●J136-543

古関裕而の昭和史：国民を背負った作曲家 請求番号●J136-636

*他にもありますので、OPACで検索してみてください。

たかはし きょうこ ● 今年は、作曲家レハールの生誕150年。「メリー・ウイドウ」など、オペレッタで有名ですね。

私のおすすめ

好きな曲

DVD

演奏・創作学科声楽専修 4年 古田 もね

様々な逸話を持つロッシーニには39のオペラ作品があり、すべてのジャンルで成功しています。しかし、37歳の時の「ウィリアム・テル」以降はオペラ作品を作曲していません。さて、私のおすすめは、「イタリアのトルコ人」のDVDです。当時のオペラ作品を多数執筆したフェリーチェ・ロマーニの台本で、本能のままに生きる女性の恋の駆け引きを題材にしています。興味を持ったきっかけは、ロッシーニのCDをプレゼントされたことでした。その中で印象に残った曲は二重唱「奥様のお好きな様に」です。嬉しいことに昨年発表会でこの曲を歌う機会がありました。その後観に行けないと思っていた1814年の初演と同じミラノ・スカラ座での上演をイタリアのラジオで生放送されているのを自宅で聞き、感激しました。

あらすじは、愛人がいる気紛れな妻フィオリツァと、そんな妻に振り回される年老いた夫ジェローニオの夫婦が主人公で、フィオリツァはトルコから来た若い男セリムと意気投合します。妻の生活態度に苦情を言う夫に対してフィオリツァは好きだとなだめますが、そうかと思えば千人の愛人を作って夫を困らせようと企み、

全く反省していない様子です。セリムが偶然元恋人ザイダに出会います。そこにフィオリツァが現れ二股疑惑で、恋のライバルが集まり大混乱です。セリムは仮面舞踏会にまぎれてフィオリツァをトルコに連れて帰ろうと試みますが、セリムとフィオリツァと同じ格好をしている人が他にもいて見分けがつかません…結局二人はトルコに行き結ばれるのでしょうか？是非見て確かめて下さい。

また、歌劇「新聞」には「イタリアのトルコ人」の曲など自作の転用があるので聞き比べると面白いです。どちらの作品も愉快です。初演ではフィオリツァの不道徳さに反感があったようですが、今の時代にも起こりそうな恋愛のゴタゴタ話なので、難しいと思わず楽しんで観賞出来る作品だと思います。

「Il turco in Italia」
Gioachino Rossini
Arthaus Musik c2010
請求番号●VE2716



ふるた もね ● 大学好きすぎて卒業したくないです。新型コロナウイルスの影響で、往復50キロ以上ある大学まで自転車で通ってみました。

ピアノ科、必見!!

図書

大学院音楽研究科修士課程器楽専攻[ピアノ]1年 吉原 佑香

私がこの本に出会った時には既に3巻出ていまして、今回紹介するのは第2巻です。確か学部2年の時、ピアノの特別レッスンや公開レッスンを聴講し、先生から語られるアドバイスやお話に感動していた頃です。なので、スタディールームに置かれていたこのピアニストのインタビュー集がパツと目に入ったのです。これは絶対面白そうだと直感し、すぐに借りました。今思い返すと、私の学部時代の音楽への取り組み方に大きく影響した本だと言えます。

まず手に取った第2巻にはツイメルマンがいました。私は彼のショパンのバラードの演奏が大好きだったので、インタビューを読んでみたいと軽い気持ちで読み進めたのですが…当時のポランドのこと、自身の幼少期、レッスンやコンクール、アンサンブルやソロに取り組むときの考え、芸術家の本質、楽譜からどのように読み解くカルトスワフスキの作品を通してのお話等々…幅広い内容に圧倒されてしまいました。

他にも、ツイメルマンだけでなく10人以上ものピアニストが率直にご自身の音楽についての考えを自由に語っています。(本学

でも隔年、特別レッスンをして下さっているペロフ先生もいますよ!!)そして、素晴らしいピアニストという共通点があるものの各国の情勢・政治・生き抜いた時代・生活は皆様々です。ピアニストである当事者から語られると、政治や教育などの歴史をとっても直接的に感じる事が出来ます。

以上のように、この本からはピアニストの方々がかどのようにして音楽に、ピアノに向き合っているのかを知ることが出来ます。その中で、自分とは違う考えや欠けているものを発見したり、反対に自分が感じていたことが同じだったり。また、なかなか音楽を言葉で表現するのは難しい作業ですが、事細かに議論しているのでとにかく面白い上に勉強になるのです。最後に、読み終えた時気づくのですが、全ての人が最後のインタビューアの質問に共通したメッセージを伝えています。それは…。どうぞ、ご自身の目でお確かめ下さい♪

音符ではなく、音楽を! :ピアニストが語る!(現代の世界的ピアニストたちとの対話 第2巻) 焦元溥著 森岡葉訳 アルファベータブックス 2015 請求番号●シラバス||鍵盤楽器||B4(J128650)



よしはら ゆうか ●今春はコロナウイルスで図書館には行けなかったのですが、なんと第4巻が出ていました。



国立国会図書館デジタルコレクション



2020年4月から、国立国会図書館が提供する図書館向けデジタル化資料送信サービスに参加しました。これは、国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、絶版等の理由で入手が困難な資料を、当館のPCから検索して閲覧・複写できるサービスです。

国立国会図書館で収集・保存しているデジタル資料は、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)で検索・閲覧できます。ただ資料によって読める範囲が異なり、インターネットに公開され誰でも読めるもの、逆に国立国会図書館に行かないと読めないもの、そしてこの送信サービス参加館であれば読めるものがありました。今回からこの3番目の部分を使えるようになりました。

収録されているのは図書のほか、雑誌記事や博士論文などもあります。目次からも検索できます。

ご利用は、館内の専用PCからのみになります。使ってみたい方

は、2階のカウンターにお知らせください。複写も受け付けます(申込制・後日お渡し・電子ファイルのダウンロードは不可)。

新しいサービスをぜひご利用ください。



「国立国会図書館デジタルコレクション」より、トップページ

Information

資料の返却前に確認を

「パート譜が不足」「CDや解説書が入っていないかった」など返却時のトラブルがしばしば見られます。資料が揃っていない場合、返却処理ができませんので、返却前には今一度確認をお願いいたします。また、借りた際に資料の状態に不自然な点がありましたら、カウンターまでお知らせください。

資料の水濡れに注意

返却された本や楽譜、CDケースが水で濡れていることがあります。資料を傷めますので、雨の日はビニール袋に入れる、ペットボトルと一緒に入れ物で持ち運ばないなど、資料が濡れない扱いをお願いいたします。

TAC加盟館の図書を利用できます

当館で所蔵していない図書でもTAC加盟館にあれば、TAC便で取り寄せて当館資料と同じように利用できます(TLL)。お申込みは2Fメインカウンターまで。

TAC加盟館の所蔵はTACOPACで検索できます。TAC便の詳細な運行日程はカウンターにおたずねください。

購入希望を受け付けます

購入希望は後期学科通常授業終了まで受け付けます。2Fメインカウンターでお申込みください。

海外の出版社の資料は図書館到着まで時間がかかります。お申込みはお早めに。

長時間の離席、ご注意ください!

盗難に会う危険がありますので、長時間席を立つ時は荷物を持ってください。また、荷物を置いての席取りはご遠慮ください。

感染防止対策ご協力をお願いします

図書館来館の際は、マスクの着用と手指の消毒をお願いします。館内の座席は間隔を空けて設置しています。1人で静かにご利用をお願いします。

各種請求票・申込書はカウンターでお渡ししています。必要なときはカウンターにお声がけください。

- 表紙：原怜那 武蔵野美術大学造形学部デザイン情報学科 3年
- 発行：国立音楽大学附属図書館
- 編集担当：高橋京子・宮部真砂子

- 国立音楽大学附属図書館
- <https://www.lib.kunitachi.ac.jp>
- E-mail info_lib@kunitachi.ac.jp